

人と人

社会の中で

生きる自由を

幸せまでの距離

②



施設と同じ建物内にある。

吹かせる決意をした。

新型コロナウイルスの流行で誰

もが人との距離を取ることが求め

られた。翠さんの胸の内に込み上

がら家族が中心となつてケアして

いた。翠さんは壮さんの生活、そ

して家族の生活を模索し続けてき

た。「それぞれの人権はどうなる

のか。壮だつて20代の若者。ずつ

と親と暮らすのがいいはずがな

い」。2年前、壮さんにシェアハ

ウスでの生活をさせてみることに

した。

家族と離れてから壮さんは食べ

られる物が増え、相手の様子を見

て待つこともできるようになつ

た。「愛想笑いなんてする子じゃ

なかった」と翠さん。「生活を成

と強く思う。

久保田翠さん(59) 隠微知的障害者の息子 自立見守る

ヘルパーの隣で、いつものように石を容器に入れて音を鳴らしたり、スマートフォンから流れる音楽に耳を澄ませたりする久保田壮(たけし)さん(26)。重度知的障害がある息子が他者と関わりながら過ごす姿に、母親の翠さん(59)は浜松市中央区は確信する。「壮は社会の中で生きている。安心して手を放すことができる」

壮さんが暮らすのは市中心街の一角のシェアハウス。同ハウスは翠さんが理事長を務めるNPO法人クリエイティブサポートレッツが運営する重度知的障害者の通所

多様な人と関わりながら生活する久保田壮さん(左から2人目)を見つめる翠さん(右)12月下旬、浜松市中央区

り立たせる努力ができる」と。驚くと同時に頼もしく感じる。

他者と関わることは、生活の質を上げる。壮さんがそうであるように、翠さんにとってコロナ禍は、

入所施設やグループホームに入る選択肢もあった。でもそれは、

壮さんの生活の幅を制限し、幼少

期から持ち歩く石を取り上げざる

を得ない。「壮から自由を奪うこ

とはできない」。重度知的障害者

の従来の暮らし方に、新しい風を

松総局・中井公二)

<メモ>久保田壮さんが石で音を鳴らし続ける行為について、翠さんは「唯一やり続けて手放さなかった。壮にとって大切なこと」と考える。NPO法人クリエイティブサポートレッツが運営する施設では障害者が床に寝そべったり、ドラムで爆音を響かせたりしている。問題行動だと見られがちな行為を熱意や表現と捉え「ありのまま」を大切にする。昨年11月、街中の空き地で誰かが自由にイベントを開いた。「目的がない場所でも意外に豊かだと見てもらえた」と実感する。誰もが暮らしやすい社会のあり方も発信し続ける。